

別表Ⅰ 学校において予防すべき感染症の種類と出席停止期間の基準

令和5年5月8日改定

分類	病気の種類	出席停止の期間
第一種 感染症	エボラ出血熱、クリミア・コンゴ出血熱、痘瘡、南米出血熱、ペスト、マールブルグ熱、ラッサ熱、ポリオ、ジフテリア、重症急性呼吸器症候群、鳥インフルエンザ（H5N1） ※上記の他、新型インフルエンザ等感染症、指定感染症及び新感染症	治癒するまで
第二種 感染症	<u>新型コロナウイルス感染症</u> 注1)	<u>発症した後5日を経過し、かつ症状が軽快した後1日を経過するまで</u> 注2)
	インフルエンザ（鳥インフルエンザ（H5N1）を除く）	発症した後5日を経過し、かつ解熱後2日（幼児にあつては3日）を経過するまで注2)
	百日咳	特有の咳が消失するまで、又は5日間の適正な抗菌性物質製剤による治療が終了するまで注2)
	麻疹	解熱後3日を経過するまで注2)
	流行性耳下腺炎（おたふくかぜ）	耳下腺、顎下腺又は舌下線の腫脹が発現した後5日を経過し、かつ、全身状態が良好になるまで注2)
	風疹	発疹が消失するまで
	水痘（みずぼうそう）	すべての発疹が痂皮化するまで
	咽頭結膜熱（プール熱）	主要症状が消退した後2日を経過するまで注2)
	結核	病状により学校医その他の医師において感染のおそれがないと認めるまで
	髄膜炎菌性髄膜炎	病状により学校医その他の医師において感染のおそれがないと認めるまで
第三種 感染症	コレラ、細菌性赤痢、腸管出血性大腸菌感染症、腸チフス、パラチフス、流行性角結膜炎、急性出血性結膜炎、その他の感染症	病状により学校医その他の医師において感染のおそれがないと認めるまで
	(条件によっては出席停止の措置が考えられる疾患)	
	溶連菌感染症、ウィルス性肝炎、手足口病、伝染性紅斑、ヘルパンギーナ、マイコプラズマ感染症、感染性胃腸炎など	全身状態が悪いなど、医師の判断で出席停止を要する場合など

通常、出席停止の措置は必要ないと考えられる感染症の例：

アタマジラミ、水いぼ、伝染性膿痂疹（とびひ）

注1）発症から10日間を経過するまでマスクを着用するようお願いします。注2）「発症・発現・解熱・消退・軽快した後〇日を経過」とは発症などした当日は0日とし、翌日から1日、2日・・・と数えること。

※学校感染症罹患し治癒後に登校を再開する際は、保護者が「学校感染症 罹患届」を記入し、担任に提出してください。（医師

の証明は不要です）新型コロナウイルス感染症は、発症から10日間を経過するまではマスクを着用するようお願いします。